

上海のドイツ・ユダヤ人 (2)

— 序 説 —

山 下 肇

(は し が き)

ちょうど一年前に前回の拙稿を書いたから後、私にとって実に多くの Novum が生れた。まず第一に、この研究テーマを更に本格的なものとするために、やがて上海の復旦大学へ暫く渡航することが本決りとなったことである。第二には、人々の好意に助けられて、前稿以降に予想外に多くの新資料を入手することが出来、私の凝視する諸問題が一段と確実によく見えてきたことであり、第三には「日中近代文学交流史」共同研究グループ¹をはじめとする日本の学界第一線の中国研究者諸氏との親交関係がひらけ、今後は中国側の研究者との交流への希望もひらけてきたことである。したがって、本稿はそのような新状況を前提とした「序説」にすぎず、いわば渡航前のあくまで準備作業をとりまとめるに留まるものであることをお断わりしておきたい。西独のゲルマニストと中国の交流も近年ようやく活発化し、特に上海においてそれが著しい実情も判明しつつある。

ここで本題に入るに先立って、前稿とも似た一つの文章をライトモチーフ風に引用させて頂くことをお許し願いたい。それは堀田善衛が1945年、3月10日の東京大空襲直後に、敢えて27歳で上海に渡り、そこで現実に体験した一つのエピソードを記した文章である。

「あるアパートメントから、洋装の、白いかぶりものに白いふぁーッと

した例の花嫁衣裳を着た中国人の花嫁が出て来て、見送りの人々と別れを惜しんでいた。自動車が待っていた。私は、それを通りの向い側から見ていた。すると、そのアパートの曲り角から、公用という腕章をつけた日本兵が三人やって来た。そのうちの一人が、つと、見送りの人々のなかに割って入って、この花嫁の白いかぶりものをひんめくり、齒をむき出して何かを言いながら太い指で彼女の頬を二三度ついた。やがて彼のカーキ色の軍服をまとった腕は下方へさがって行って、胸と下腹部を……。私はすつと血の気がひいて行くのを感じ、よろよろと自分が通りを横断していると覺えた。腕力などというものがまったくなくせに、人一倍無謀な私は、その兵隊につっかかり、撲り倒され蹴りつけられ、頬骨をいやというほどコンクリートにうちつけられた。——私は元来のろくさい男だ。ものごとがわかるについても、ぱっとわかるという具合には行かない。のろのろとしかわからない。そのくせ、あるいは、だから、自分でわかったと思うことを過信する傾きもないではない。撲り倒され蹴りつけられて、やっと、あるいは次第次第に、**“皇軍”**の一部が**現実**に、この中国でどういうことをやっているかを私は**現実**に諒解して行った。倒されたまま私はなかなか起き上がることが出来なかった。上海に来る前に、私は肋膜炎を病み、その旧患部を——兵隊たちはゴム足袋をはいていたが——蹴られたこともあった。その場の中国人たちが花嫁ともどもに私を助け起してくれて、アパートの一室へつれ込んでくれた。

あの子の花嫁は、恐らく一生を通じて、あの晴れの門出のときに、かぶりものをまくりあげられ、頬をこづかれ、また乳と下腹部をまさぐられた経験をおぼれぬであろう。たとえあの兵隊自身にはそれほど悪意はなかったにしても——というのが、私にとっての一つの出発点であった。」

(堀田善衛『上海にて』²より)

4. 日本側の対ユダヤ方針の曲折

貴様は上海をのぞいたか、腐ったため槽を、……嗤ふべき小節義漢の貴様、日本人よ。……さそりのやうな軍国主義の陰影よ。病気の病気よ。傷の傷よ。

——俺は君の癩患の腕をとって立つ。呼吸もつまるお前と一緒に人間の精神を強調しよう。棺のやうな夜が俺のまはりに上海を落しこみながら暮れる。

(金子光晴詩『上海』³より)。

ドイツ・オーストリア系のユダヤ難民たちが一斉にヨーロッパから逃げ出して、ドッと吐き出されるように上海の港市に流れこんだのは、1938年秋、あの「水晶の夜」の嵐が吹きすさんだ直後からであり、その上海第1号を運んできたのは、イタリア商船コンテ・ビオレ号だったといわれている⁴。一等船客の高い船賃を払わされて、低い船底に詰めこまれるように載せられながら。当時、この難民たちの亡命ルートとしては、二つの選択肢があり、一つはイタリアから海路スエズ運河を通り、或いは喜望峰を迂回して上海に向う道であったが、この可能性は1940年6月10日以降、イタリアのムッソリーニがヒトラー・ナチス側に参戦してからは途絶された⁵。従来ユダヤ難民を多く受け入れてきた英国統治下のパレスチナでは、当時はすでに海岸線に着く難民船にむけて陸上から英国軍が機関銃で一斉射撃を加える状況であった⁶。

もう一つのルートは、より一層成算の見込みの薄い、陸路ソ連シベリア経由で満州里に向う困難な道であり、すでに満州（東北）は日本軍の占領下にあった。通常、ソ連はすべての旅行者に、更に遠い国への入国ビザの役も果す「通過ビザ」(Transitvisa)を交付していたが、ユダヤ人逃亡者難民に対しては、必ずしもそれが励行されず、例えばガリチアのレンベルク（現ソ連領ルヴォフ）からのユダヤ人はやむなくシベリアの労働キャン

プにひとまず定着せざるをえなかった。ソ連政府が多民族自治の原則にしたがってシベリア酷寒の原野にユダヤ民族自治区「プロビジャン」開拓州を設けたことは周知の通りだが、ほとんど都市生活者の多いユダヤ難民にこの不毛の地帯の開発は耐えがたく、この「州」は成立しえなかったようである。彼らは万難を排してソ満国境のオトポールにまで集結し（約2万人1938年3月）、そこから国境を越えて満州里に入り、ハルビン、大連、天津をへて遂に上海に達する。この難路を突破する道程には、前回にも触れた満州地方のロシア系ユダヤ人進出の歴史背景と当時のハルビン特務機関長樋口季一郎少将の果敢な義挙⁷とが大きく作用している。この間に数多くの感動的なエピソードも生れたが、それは差当って後日回しとすることにしよう。

上海の特殊条件といえば、47歳の魯迅が夫人許広平と共に来住(1927年)したのをはじめ、多くの中国文学者が集まり、内山書店が賑わい、横光利一、金子光晴、尾崎秀実、A. スメドレー等も来市したさなかで、満州事変・上海事変相次いで起り、超樹理『李家荘の変遷』⁸に描かれるような日中間の泥沼の戦争状態の続くなかで、上海は唯一の両国政府の管理力が及ばない上に仏・共同租界という植民地的行政区域が存在し、同時に共同租界の虹口地区が日本海軍の警備地とされ、陸軍の支配権外でもあった関係で中国人難民も多数流入した「上海特別市」といっても、一種独特の自由都市、「治外法権」下におかれた大都会として、世界にも類のない、一元的な「出入国管理」機関が存在せず、その結果として諸国民ないし世界の無国籍者たちも、まったく無査証のまま上陸が可能となったのである。当時はむろん日本人もビザ不要であり、長崎との往来は頻繁を極め、両側市民の往来はきわめて気楽で自由なものであった。上海在住の外国人富豪たちは毎夏雲仙国際ホテルに避暑に来るならいで、長崎市民も日本国内では観ることのできない映画演劇や音楽を楽しむに上海へ出かけるのが常であった。サッスーン財閥に次ぐユダヤ商社カドーリ家の総帥サー・エレー・

カドーリ翁（人望篤い慈善家）の後妻となった松田けい（1872・明治5年長崎生れ）の影響で翁は大の日本びいき、この翁亡き後松田けいは戦争末期に長崎へ帰郷して原爆禍にあったようである。

1939年夏には、上海のユダヤ難民は共同租界に溢れんばかりの状態では、そこへ陸続とまた船の着くたびにユダヤ難民が上陸してふくれ上る勢いでは、現地ユダヤ人は急遽ユダヤ難民救済委員会を結成し、海軍警備地区虹口側の元中・小学校など無人化した建物に収容し、給食、生活補助を行ない、本文の主人公フリッツ・カウフマン（Fritz Kauffmann）もこの委員会の中核となって活動したのであろう。当時の「大上海」といわれた市の人口はおよそ中国人350万から500万、外国人7万5千のうちユダヤ人3万、日本人は4万5千、そこへ中国難民が20万以上も流れこんで、住宅事情も最悪、浮浪者がうようよだったといわれる。近年たまたま神戸の古書店で本学のシャウヴェッカー氏が発見した当時の小型『ドイツ亡命者上海アドレブック』（1939年11月）⁹ はまことに貴重なもので、ここにはドイツ・オーストリア系ユダヤ人約5,300名の氏名・現住所と併せて出身地・職業も記され、更に難民の世話担当・登録の事務局や諸外国の出先機関のほか、上海で利用できる亡命者経営の新聞、出版、弁護士、医師、ユダヤ教会その他各種店舗の広告も併載されていて興味深い。5,300という数字は家族単位と考えるとよいから、実人口はその3、4倍に達していたとみてまちがいあるまい。

こうした状況のため、日本海軍軍令部はこの難民処遇の諸問題に関し上海ユダヤ人指導部と折衝する必要を考え、犬塚惟重大佐がユダヤ問題に精通しているところから同大佐を上海に派遣し、1939年4月にユダヤ工作を主務とする「犬塚機関」が設置された。その事務所はかの有名なブロードウェイマンション（現在の上海大廈）の16階1502号室であった¹⁰。上海ユダヤ人指導部はいうまでもなく阿片戦争以来の上海先住者たちであり上海の近代都市西欧風市街地の構築者であるセファルディム系英米仏国籍のユダ

ヤ富裕層であったが、フリッツ・カウフマンは国際貿易に活動してこれら財閥系商社や日本との通商関係にも従い、国籍上からもドイツ生れながらきわめて中立的な、相互信頼の得られやすい立場にいたということができよう。ちなみに犬塚大佐も、陸海軍部内の複雑な事情から、少将進級を条件に暫く海上勤務を命ぜられそうになり、敢えて現役を退いて予備役編入の身となり、その退職金をつぎこんでも上海ユダヤ工作をライフワークに選ぶ道を進んで、この「犬塚機関」設置となったのである。陸軍ではすでに一年前から安江仙弘大佐¹¹がユダヤ通として大連の特務機関長に赴任しており、陸海軍のさまざまな対立関係のなかでも、この二人のユダヤ通は相携えて肝胆照しあう双壁として親ユダヤ的な理解の深さを貫いたことは、極東地域の亡命ユダヤ人たちにとって不幸中の倖いであつたらう。そして、この両者の同志的画策により第一次近衛内閣の五相会議で「猶太人対策要綱」（興亜院極秘資料）が決定され、その三カ条の基本方針がその後も永く反ユダヤ策謀を抑えることになる決定的時点は、1938年12月6日のことであつた¹²。

爾来犬塚は上海ユダヤ指導部と密に接触し、在米ユダヤ支援機関にも在米の同志邦人を通して説得を続け、また安江や在満のロシア系ユダヤ組織とも連繋して、幾つかの具体的方策の推進に努力する。その一つはハルビンに本拠をおく極東民族中央協議会（アシュケナジム系）の会長アブラム・カウフマン博士を議長とする「極東ユダヤ民会代表会議」が満州または上海にユダヤ居住地区設定の請願を決議することであつた。この会議の第一回は1937年12月（ハルビン）、第二回は翌38年12月（同）、共に満州国建設、「五族協和」に協力する決議を発表、続く第三回（39年12月、同）には初めて上海からアシュケナジム系代表も参加、ここで日本政府及び在米ユダヤ会議と米ユダヤ議員会議にユダヤ地区設定請願の決議を打電している。安江、犬塚両者の努力の成果である。これが米側の反日感情を和らげ、在米ユダヤ資本の強力な資金援助を期待するものだったことはいま

でもない。

その二は、従来蔣政権の絶大な後援者だったサッスン財閥の親英米感情を何とか親日の方向に切りかえさせ、併せて37年末に樹立された反蔣親日派の上海大同市政府（市長蘇錫文）が提案する「上海自由港」化プランを実現して、同政府下の大上海区域内にユダヤ地区を設定することである。上海が香港同様の半永久自由港となれば、米国が対日軍需物資の禁輸を断行しても、仏印ユダヤルート等を使って上海が活路をひらく。……しかし、第二次世界大戦に突入するや、世界各国のユダヤ救援組織は一斉に足元に火がついたように、目前の大戦の動向を追うことに急となり、中国大陸のユダヤ問題まではほとんど目が届かないのが実情となっていく。既出のデイヴィッド・クランツラーの労作¹³によれば、日本の対ユダヤ政策は四つの発展段階に分けられている。

1. 1931—1935 無関心
2. 1936—1938 友好的な諸傾向
3. 1938—1941 積極的な姿勢
4. 1941—1945 むしろ敵意を含んだ無関心への逆行悪化

1940（昭和15）年になっても、犬塚の在米ユダヤ指導層と上海指導部へのユダヤ地区設定のための工作は執拗に続けられた。この時点では、満州の地区設定はすでに陸軍部内の反ユダヤ気運のため絶望となり、もっぱら上海の楊樹浦^{ヨーツプ}ユダヤ難民キャンプを本格的な居住地区に拡充する方針が進められていた。この場合も、反ユダヤ的な妨害や懐疑派の逡巡が根強く続き、特にドイツ系ユダヤ人でソ連国籍のリヒェルト・ゾルゲ博士の赤軍第四本部情報将校としての諜報活動が尾崎秀実等を含む組織的スパイ事件として発覚するにいたる（1941年10月検挙）前兆的な動きもいち早く捕えられていて、反共的な警戒強化の風潮は日ましに強まっていたのである。従って反犬塚の動きが暗躍的に強まっていたことも否めない。

緊迫化する世界情勢からすれば、もはやユダヤ人にとって頼みとすると

ころは中国と日本以外にないことも日を追ってユダヤ首脳側の側にも明らかに自覚されてきた。そこで犬塚をめぐる、最終的に煮つめられた結論的な具体案は次のようなものであった。――

日本側は上海虹口地区に住むユダヤ難民18,000名を含め、3万名に上海フートン浦東を居住地区と定め、米国ユダヤはこれに対し2億円（現在値に換算して7～800億以上）の対日クレジットを設定、うち1,200万円で難民ユダヤ人の失業救済として皮革会社を設立し、残余の1億8千万円以上で日本の希望する物資・屑鉄・工作機械・石油などを無制限に供給する。これの公式請願と具体案協議のため、米国ユダヤ代表数名を日本に派遣する。――

この正式決定まであと10日ほど待機という段階に至って、突如1940年9月27日、日独伊三国軍事同盟締結のニュースが地球をかけめぐった。米国ユダヤ財閥の対日借款は、成立寸前にしてこれで水泡に帰した。その直後、大連の安江特務機関長はその職を解かれ、犬塚と同様に軍服を脱いで大連に居すわり、敗戦まで連絡機関としての任を貫く。犬塚はますます上海で孤立しながらも、執念を燃やし続ける。

それにしても、第二大戦、太平洋戦争突入までのナチスドイツの上海出先機関は、ユダヤ対策にもそれほど過激ではなかった。虹口地区難民に対しては、日本海軍の復興部が居住許可を出し、その許可証発給はドイツ総領事館とされていた。難民ユダヤ人をのせたイタリア船第一便が上海に着いたときも、「ドイツ国籍ユダヤ人はB級ドイツ人（旅券にJの捺印）と認めるから、そのように取扱われたし」という対応だった。無国籍亡命者ではなく、いわば第三人としての権利保有者として保護してくれ、という意味であろう。ドイツ国内では邪魔者であっても、日本がナチスを真似て難民を排斥し、ドイツに強制送還でもされたら、かえって困りものなのだ。1940年段階でも、まだ「最終解決」といわれる根絶計画はなく、「上海にきたユダヤ難民には政治的危険分子はなく、日本に対する有害分子もないから、特別な政治的思想的顧慮の要はない。現にドイツは戦争第一

主義であって、ユダヤ人の処理はむしろ戦後の問題だろう」と当地のドイツ当局は考えていたようだ。だから難民キャンプも決して「ゲッター」ではなく、日本側も決して「ゲッター」とは考えていなかったのである。逆にいえば、太平洋戦争突入以降も、日本の軍部は早くから独ソ戦のナチス軍敗北と撤退の情報を得ていたために、「最終解決」の永続きしないことを察知し、上海のユダヤ人処遇も決してそれ以上過激化しないよう慎重を期して、ゲシュタポ側の要求を肯んじなかったと思われる。

その他に犬塚の行なった代表的な仕事として特記すべきものが二つある。その一つは、上海共同租界で1939年度に行なわれた参事会員選挙で、それ迄の参事会員定数は英5、米2、日2、中5の14名で、日本側の租界行政への発言権は弱く、これを日本代表5名に増員させたいのが日本側の希望であった。選挙の結果は、住民の意志がおのずから親英米か親日かの動向を表明して勢力分布がはっきりするわけだから、日本側としても真剣に取組まざるをえず、特にユダヤ難民キャンプの票の行方がキャスティングボードを握っているとあって、犬塚を中心としたキャンプへの働きかけは活発化した。選挙戦は宣伝戦でもあるから、期せずして英米側からも謀略的デマ宣伝や脅しもとびかい、虚々実々の様相を呈した。結果は僅少差で日本側の敗北に終わったが、その間に、従来のアシュケナジム協会（ロシア系）とセファルディム協会の二派に加えて、難民を主とするドイツ・オーストリア系協会設立の動きも始まり、犬塚はこれらの人々との接触を深め、実態を掌握して、その効果は大きかったという。

今一つの仕事は、1940年夏、東欧ユダヤ教タルムード学校の学生たちの救出に奇蹟的に成功した事例である。この話は一般には、リトアニアの日本の副領事杉原千畝が通過査証の捺印を、職を賭して敢行し、ポーランド系ユダヤ難民44名をシベリアから敦賀、神戸へと脱出させた美挙として有名であるが、事実は犬塚の手腕に負うところ大であったという。この問題の大きさは、ナチスのため欧州全地域で潰滅に傾いていたユダヤ教の宗教

伝統を、ポーランドに残存するラビとその教え子たち 900 名を辛くもまず救い出すことによって、危急存亡の瞬間からよみがえらせることに成功した点であり、次いで神戸のユダヤ教機関が全力をあげてこの難局に挺身したことであろう。この先陣のあとを追うポーランド・ユダヤ難民の群もりトニア、コブノの活路を突破して神戸に集結し、やがて米国へ、一部は上海へと渡ることができた。シャウヴェッカー氏の発掘した『上海亡命者アドレスブック』も、あるいはこの当時の神戸の遺品であるのかもしれない。

いささか犬塚の周辺にかかずらわりすぎたようである。当時の楊樹浦ユダヤ難民キャンプの状況をこそまず記さねばならなかったであろう。

5. 上海ユダヤ難民キャンプ

盧溝橋事件から第二次上海事変、次いで日中全面戦争の始まる 1937 年は、租界地区を除いた上海全市が日本軍の手に落ち、その戦禍のあとも生々しい虹口地区にユダヤ難民キャンプ（収容所ではあっても、いわゆる「強制収容所」KZではない）の設定された年であった。事変前この地区に住んだ日本市民は、その他の地域も含めて 8 割方一時帰国を強いられ、郭沫若や鹿地亘、長谷川テル等も上海を脱出して香港に移った。日本軍統治下、いわば藻ぬけの殻同然ともなった上海に、中国の地方からの難民も、世界各地からのユダヤ難民も陸続と蝟集してくる。戦禍に荒廃した「東洋のパリ」は、それでもまだ英米仏国籍その他、むろんドイツ人、オーストリア人を含めて、租界住人は 54 か国籍もの白人、インド人等々が入りまじって依然文字通りの「インターナショナル・セツルメント」の世界を維持しており、各国スパイはいうに及ばず、二重三重のスパイ、ギャング、地下活動家、小悪党、娼婦等のうごめく例の「上海バンスキング」さながらの「無法地帯」に変りはなかったが、それにしても租界当局が中立宣言を

したため、日本軍も租界内には手が出せず、その年11月には国民党軍がここを撤退したから、租界は一層「孤島」の様相を深めた。悪名をとどろかせた伝説的なギャング王であり暗黒街の大ボス、前章に述べた租界工部局の中国人理事にもなった杜月笙¹⁴は、フランス租界の一角に邸を構えていたが、この年抗日活動に加わった後、やはり香港へ逃亡した。1945年の上海で、軍の略奪集積した財宝を一攫千金で逃亡時日本に持帰り、戦後日本の政界の黒幕に化けたと伝えられる児玉誉志夫のごとき存在であったのかもしれない。

虹口の楊樹浦にあるユダヤ難民キャンプは、それから数年ならずして、荒涼とした中にも見ちがえるほど新しい生活様式を整えていき、それなりに希望にみちた独特な地域を成立させて、上海の das „Klein-Wien“（小ウィーン）ともよばれるようになった。この変化の原因は、月並なことながら、他の租界地区よりも生活がはるかに安上りであり、共同生活の中での相互扶助、共存共栄の生活感覚が浸透していたからだろう。1938—40年の間に、ここにはレストラン、カフェ、各種商店や小工場などが立ち並んだ。中国人と外国人商人たちの平和共存の光景も見られた。自力ですぐには生活のできない難民たちが、ユダヤ救援組織の手で用意された五つの居住施設で宿舍と食事を供給され、それ以外の住居・寝所を持っていても職を得られない人々もこの給養の世話を受けた。医療施設も三カ所つくられた。ブロードウェイからこのキャンプへ行く道には、難民たちの営む小さな店が、店とはいえない一坪ほどの場所にささやかな品々を並べて開かれていた。婦人服、婦人帽、アクセサリー、靴等々、精一杯の誠意を示す商いぶりであった。世界のどこにも行き場を失った彼らがようやくつかんだ安住の場所に必死ですがりつき、何としてでも生きていこうとする熱情がそこに見られ、何よりも彼らを喜ばせたのは、自由にドイツ語が使えることだった。亡命の本命とされたアメリカでさえ、ドイツ語使用は禁じられ、英語でなければすぐスパイや差別の対象とされがちだったのだから、

そこに das „Klein-Wien“ の言葉も生きていた。地区の中央に「虹口マーケット」とよばれるマーケット広場もあり、少女時代の林京子もよくここを訪れたようだ。

犬塚きよ子の記述によれば、1940年の2月11日（当時の「紀元節」）、ユダヤ財閥アブラハム夫人の寄附によるキャンプ内の産科病院の開所式が催され、その祝宴に日本海軍の軍医たちと共に犬塚夫妻も招待された。そこは元の中学校舎だった煉瓦造りの第1収容所で、元教室の一室に10家族ほどの割合で二段ベッド、カーテン仕切りで起居し、一階には大きなキッチンがあり、6,800人分の給食をまかなっていた。他の場所も加えると、当時約13,000名の難民ユダヤ人がこの地域に住み、もはやこれ以上の難民が加われば、満杯お手上げの切実な状況であり、指導層は受入れ制限の措置を講じるよう海軍当局に請願に及ぼうと、頭を痛めていたという。しかもここでは、学校、幼稚園、職業補導施設、各種医療機関等もユダヤ財閥の寄附によって整備され、既述した『アドレスブック』にも掲げられた事務局が領事館代りの世話を担当していた。犬塚氏の書にはこれらの記念写真も載っており、中には10歳の少女がひとりではるばるオーストリアから両親を訪ねて上海に辿りついたのを歓迎するパーティの写真まである。日中戦争の下でさえなければ、ユダヤ難民にとって上海は世界で唯一の自由な憩いの場、楽天地といっても過言ではなかったであろう。

S. エングラートの示す1939年の調査によれば¹⁵、難民のおよそ55%は脱出時は40歳をこえた人々であり、今後の生計の道には多くの悪条件を具えていたが、同年の前半期に届出のあった新開業の店舗は次のようなものであった。洋服店32、カフェ29、下着店6、帽子屋11、美容室6、紳士服仕立屋14、青果物商19、診療所149、手工業・職人店377、食料品雑貨店92、宝石店5、薬局4、質屋1、洗濯屋2、ソーセージ製造1。

それ迄は英字週刊誌が一つのみだった出版物も、この数年間にドイツ語の朝刊新聞2紙、夕刊紙1が創刊され、その他の週・月刊誌類も各種誕生

した。なかで最も重要なのは、元来月刊誌として発刊されながら1939年末には週刊となった „die Gelbe Post“ で、1940年半ば以降は日刊紙に発展した。編集兼発行人はかつてのジクムント・フロイトの弟子であったA. J. シュトルファー (Storfer)。この新聞が現在西ドイツに保存されているものは2年分しかなく、この相当な高水準の内容紙の全巻を総観することができれば、当時の状況と世論動向を知る重要な資料となりうるであろう。例えば毛沢東の「大長征」による中国共産党の拠点となった延安地区にこれらユダヤ難民たちの居住地移動はできないか、といった論議が1939/40年の同紙上を賑わせているのも興深い。逆に独ソ戦が開始されて、ナチス軍がスターリングラードに向かって進撃する1941年夏の陣の頃には、上海在住のいわゆる白系ロシア人集団は異様な興奮に色めきたち、ソ連が敗れば故国に帰れる、ツァーリの再来か、自由なロシア共和国の建設か、といった思いもよらぬ期待にはかなく胸を躍らせる一時期もあったようである。新聞広告を見ただけでも、演劇や音楽サークル、カフェで催されるダンス・オーケストラ演奏会、週に数時間放送されるドイツ語でのプログラム、さらに1941年末からはイディッシュ語放送まで行なわれた。

当時の難民経験者の多くは戦後米国に移住したが、今日でも生存する経験者世代の人々が1981年秋、つまり40年後になって、旅行団を組織し、思い出の上海を再訪した。例えば57歳の Curd Pollack もこの „Shanghailänder“ の一人で、ロサンゼルスから旅立った。Lutz Mahlerwein がこれに同行して、テレビ撮影を行い、それに当時の記録映画や写真を組み合わせて、一篇のテレビ映画「上海への逃亡、黄浦江畔のあるユダヤ・ゲットーの思い出」 („*Flucht nach Shanghai, Erinnerungen an ein jüdisches Getto am Ufer des Wangpoo*“) を製作した。すべてドイツ語の1時間番組として、これは西独 ARD で1982年2月28日夜に放映された¹⁶。この旅行者たちは上海の街中を歩きまわり、昔の思い出の場所を訪ねて、当時の写真類の残る場面と重ねあわせ、幾人もの体験者たちがさまざまな角度か

らその体験を物語る。ブーヘンワルトで父を殺された人、このゲッターで生れた人、曾て女優として上海での舞台にも立った老婦人 Jenny Kauschnitz 等々。上述のようなキャンプ内の各場景、共同炊事や食事の場面、商店街やサッカー、テニスに興じる場面もあり、太平洋戦争下、米軍機の空襲でキャンプが爆撃され、死傷者が出る悲惨な場面もある¹⁷。シェークスピア劇やブレヒトの「三文オペラ」上演のプログラムも出る。語る人々はすべて昨日のここのように思いをこめて語り尽きない。しかし今の上海は昔とまったく状況を変えてしまっている。

1940年8月になると、上海駐屯の英軍が撤退し、同11月にはフランス租界の裁判所が「特別市政府」に接収され、「境界築路」とよばれた大通りの警察権も完全に日本のものとなった。それ以前は、この通りの両側は異った租界区で、それぞれが警察権をもっていたから、道路だけの警察権があっても、犯人は道路からすぐ両側の租界内に逃げこんでしまって、警察権が及ばず、犯罪天国といってもよい状態だったのだ。しかし、1941年12月の日米開戦（真珠湾）以来、ユダヤ難民、のみならず上海の全ユダヤ人にとって、アメリカからの送金・支払いがすべてストップするという重大な事態が到来し、食糧事情も急激に悪化した。古くから在住の富裕なユダヤ人層からの援助も期待できなくなってきた。セフェルディム系の彼らの多くは英国籍で、その資産は日本によって凍結され、銀行預金も毎月の生計程度に払い出しを制限されてしまったのだ。サッスーン家の当主は香港へ逃亡するにいたる有様で、この窮状の行きつくところ、1943年2月18日には、遂に一つの破局が襲来した。日本陸海軍の命令により、すべてのユダヤ人はこの虹口 キャンプ 一地区に強制収容されることになったのである。これで一つのゲッターという言葉が現実となった。非ユダヤ人でユダヤ人の妻となっている婦人約100名は、子供たちとゲッターの外で生活するために、夫から切り離された。これから以後が、上海のユダヤ人たちの本当の苦難の時期であり、VTR に映し出される人々にとっても、暗い涙

の時代であつたらう。

1941年12月、ちょうどナチス軍がスターリングラード前で零下36度の大寒波襲来に立往生し、夏以来の戦斗で夏服のままの将兵が冬将軍のため大敗北を喫していた頃、すなわち日米開戦と相前後する時期に、国際的に著名なドイツの学者 ジャーナリストであるクラウス・メーナート (Klaus Mehnert, 1906—1984) 夫妻は上海にやってきた。彼の自伝的回想録『世界のなかの一ドイツ人。回想 1906—1981』¹⁸ はその世界各地をくまなくめぐり、モスクワ育ちでアメリカ、ハワイ、日本にも暮し、各地の大学で講じ、雑誌寄稿と編集で取材に歩き、各国の政治外交経済界の著名人に知己をもつ国際人の歩みを語って、一篇の世界史を読むかのごとき興味しんしんたる内容であるが、そのメーナートがちょうどの時期の上海を体験し、一介の自由人として上海を描きだす部分をここで紹介しておきたい。彼の妻エニットは上述のユダヤ人の夫と隔離されたドイツ婦人たちの中の一人と親交をもち、そこでメーナート夫妻は毎週一回自宅にこの婦人たち子供たちを昼食に招待することにした。時には20人も集まることがあり、賑やかな一刻をもつことができた。しかし、やがて上海駐在のドイツ総領事が理解を示し、この妻たちに生活扶助料を支払ってくれるようになり、彼女たちの生活も軌道に乗った。夫との隔離もごく形式的なもので、ここにも救いがあった。

ゲッターの内部も、困苦欠乏のなかにも、やがて自主的に模範的ともいえる「ドイツ的秩序」がつくりだされていき、自警団が組織されて出入口の警護に当たった。メーナートはときおりここに知人たちを訪ねている。1943年の秋の好日、彼は知人のひとりである愛すべきウィーンのユダヤ人と一緒に、「カフェ・ルイス」に陣どって語りあった。その際のウィーン人の友の話は、その間のすべてをよく物語っているように思われる。

「私はウィーンで弁護士をしていた。ナチスがオーストリアを併合する一年前から、われわれにどんなことがふりかかってくるか、およそは予想

していたよ。私はウィーンを離れようと思い、上海というところが、何のビザもなしで入ることのできる、世界でも数少ない土地の一つだ、という話を聞いた。私は持ちものを売っぱらって、金にかえ、船に乗りこんで出発した。上陸には問題はなかった。もちろん私は、まずヒトラー以前の時代の上海ユダヤ人のことに注意を向けた。そこには無数の断層があることにまもなく気がついた。たとえばレーニンの革命の結果、ロシアから中国へ来てしまったロシア人グループがあるかと思うと、もともとバグダッドからやってきて、もう永いこと上海に住んでいる、大層な金持のことが多い、もっと小さなグループもある。この両グループにはただ一点だけ一致していることがあるのさ、ヒトラーから逃げだして中部ヨーロッパからやってきた何千というユダヤ人の新来の流れ者たちを嫌っている、という一点だ。数年来われわれの間で広まっている噂は、このバグダッドユダヤ人の一番金持で指導的な男が、1937年以来この町を支配している日本の連中に接近しとるといふ話なんだ。そしてこれ以上もう難民たちを入れないように上海の門戸を閉そうとしているという。とにかく日本人は、1939年の8月に、われわれが17,000人を越えたとき、これ以上の無国籍難民の入市を禁止したんだ（ナチスは実際にわれわれを無国籍者にしてしまった）。その間に私は、自分の法律商売がほかに使い道もないので、ここで私の店を開くことにした。独身者の私は何とかうまく切り抜けてきたが、他の人たちはひどい困りようだった。ところがその頃、うまい具合にアメリカから相当の援助資金が届いたってわけ。真珠湾以後は、それがお仕舞いになって、それからゲッターへ押しこめる追放騒ぎになった。ヒトラー以前から上海に住んできたユダヤ人たちは、その目にあわないですんだ。しかしわれわれはここに屯ろして、せめて体験できるものなら、と戦争の終るのを待っている。おおよそユダヤ人のことを知らない日本人が、どうして上海にゲッターなんぞこしらえたんだろう。君たちドイツ人がわれわれにこんなひどい仕打ちをしたんじゃないのか？ 君たちの総領事か、ナチの地区

グループの仕業かな？ 日本人たちはノーと言ってるし、われわれの知ってる多くのドイツ人ももちろんノーだ。おそらくあんたなら、その秘密を探りだせるんじゃないかい」と言って、彼は疲れたような微笑を浮かべながら、話を終えた。

メーナートはこの探りを試みたけれども、うまくいかなかった。これはと思うドイツ人たちに探りを入れても、頑としてノーを誓う言葉しか返ってこなかった。一切関係していなかったという。日本人たちにしても同じ答えであった。メーナートの遂にあずかり知ることなかったこの問題の裏面について、フリッツ・カウフマンの話はある程度答えてくれるであろう。メーナート自身は、同書の別のところで触れているが¹⁹、当時まだヒトラーのユダヤ人「最終解決」のみな殺し計画については何も関知していなかった。ベルリンからのニュースには何の記載もなく、日本の新聞にも報道されず、毎日遅滞なく上海で印刷されていたソビエトの新聞にすら、長いことその記事はなかった。初めてメーナートがこの報知に接したのは1944年8月のこと、ソ連からの亡命者ミルコが毎日アヴェニュー・ジョッフルの店から持ってきてくれるソビエトの新聞紙上においてであった。進軍するソ連軍が絶滅（みな殺し）収容所にぶつかった、というものである。ソビエトの将兵たちがそこで見出したもの——それを私は怖しさに戦きながら読んだ。まだ聞いたこともない名前、マイダネク、トレ布林カ、後にアウシュヴィッツが浮び上ってきた。その記事は細部にわたり、イラストまで添えられて、とてもデマ捏造とは思えなかった。ミルコも首うなだれて、「どうも本物くさいですね」と言った。

メーナート夫妻の上海滞りは、後半にきて最悪の状態となった。彼は上海のあちこちの大学に講義に出かけていて、43年5月の8日から1週間を「ドイツ週間」と名づけた無党派のイベントを主宰することもできた。17もの催物があり、彼の開会講演は「遺産」(Das Erbe)と題され、悠久なるドイツの生命に祈りと誓いを捧げるものであった。「週間」の頂点は、室

内楽の夕べとシンフォニー・コンサート、そしてシラーの『ドン・カルロス』上演の成功だった。すべてが厳粛裡に進行した²⁰。 (続く)

注

- 1 さきの第一回稿末に添えた「その他、参考文献」12項に掲げた『近代文学における中国と日本』の共同研究グループが継続中の研究会の一環として、1987年9月27日大阪「なにわ会館」で開催された秋期公開研究会の席上、丸山昇氏（東大）と共に講演の委嘱を受け、「上海のユダヤ人」テーマでの発表を行なった。折から来日中の中国現代小説専攻の巖家炎教授（北京大学）とも同席し歓談の機を得た。まもなく丸山氏からは新著『上海物語』（集英社1987年10月）を贈られた。
- 2 堀田善衛『上海にて』102ページ、筑摩叢書157、1969年。
- 3 金子光晴『上海』1928年発表、「郁達夫君へ」のサブタイトルを付した詩句よりの抜萃、『金子光晴全集』第5巻307ページ以下。中央公論社1976年。
- 4 大塚きよ子『ユダヤ問題と日本の工作、海軍・犬塚機関の記録』日本工業新聞社1978年、93ページ。
- 5 Siefried Englert: „Sechs dürfen unter einem Gebetsschal beten.“ *Zur Geschichte der Juden in Shanghai 1937-1945*. In: „Shanghai. Stadt über dem Meer“. Hrg. von S. Englert, F. Reichert. Heidelberger Verlagsanstalt 1985, S. 110ff. 本書はハイデルベルク大学と上海の外国語学院の交流提携10年を記念して、ハイデルベルクで1985年夏学期に開催された「上海」展の際に刊行された交流の成果をまとめた書である。
- 6 パレスチナでは既に1930年、アラブで失業のなくならぬかぎり、ユダヤ人の移住を停止すべしとの意見が高まり、英植民地相パズフィールドの報告が出され、39年大戦突入と共に「バルフォア宣言」（1917年）を事実上否認する英国の白書が公表され、むしろアラブ人の独立国設立の含みをもつ内容であった。
- 7 相良俊輔『流氷の海、ある軍司令官の決断』光人社、1973年、40ページ以下。
- 8 超樹理『李家荘の変遷』（1946年上海刊）は山西省の一農村の主として1937—45年の8年間にわたる戦争と革命の時代の激動期を生きいきと伝える代表的文学作品である（小野忍訳岩波文庫、1958年）。
- 9 *Das EMIGRANTEN ADRESSBUCH SHANGHAI*. The New Star Comp. Abtlg. Verlag, Shanghai/November 1939, 141 S. (筆者もコピー所有)。
- 10 上掲注4の大塚きよ子著100ページ。以下にも本書の記述によるところが多い。
- 11 安江仙弘（1888—1950）、陸軍派遣第一期の東京外語校ロシア語科選科学生となり、シベリア出兵時はセミヨーノフ軍との間の連絡将校をつとめ、更に1927年ユダヤ問題実地研究のためパレスチナをはじめ欧州各国のユダヤ機関を歴訪した。その成果は安江仙弘著『ユダヤの人々』（軍人会館出版部、1937年）に盛られて

おり、明らかに四王天中将等の反ユダヤ主義宣伝とは対立するものである。

- 12 「猶太人対策要綱」独伊両国トノ親善関係ヲ緊密ニ保持スルハ現下ニオケル帝国外交ノ枢軸タルヲ以テ盟邦ノ排斥スル猶太人ヲ積極的ニ帝国ニ包容スルハ原則トシテ避クヘキモ、之ヲ独国ト同様極端ニ排斥スルカ如キ態度ニ出ルハ、タダニ帝国ノ多年主張シ来レル人種平等ノ精神ニ合致セサルノミナラス、現ニ帝国ノ直面セル非常時局ニ於テ戦争ノ遂行特ニ経済建設上外資ヲ導入スルノ必要ト、対米関係ヲ悪化スルコトヲ避クヘキ観点ヨリ不利ナル結果ヲ招来スルノオソレ大ナルニ鑑ミ左ノ方針ニ基キ之ヲ取扱フモノトス。

〔方針〕 1 現在日滿支ニ居住スル猶太人ニ対シテハ他国人ト同様公正ニ取扱ヒ、之ヲ特別ニ排斥スルガ如キ処置ニ出ツルコトナシ。

2 新ニ日滿支ニ渡来スル猶太人ニ対シテハ一般ニ外国人入国取締規則ノ範囲内ニ於テ公正ニ処置ス。

3 猶太人ヲ積極的ニ日滿支ニ招致スルガ如キハ之ヲ避ク、但シ資本家、技術家ノ如キ特ニ利用価値アルモノハ此ノ限りニ非ス。(近衛首相、板垣陸相、米内海相、近衛兼外相、池田蔵相、昭和13年12月6日)。

- 13 David Kranzler: *Japanese, Nazis & Jews. The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938—1945*, Yeshiva University Press, New York, 1976.

- 14 パンリン著毛里和子・毛利興三郎訳『オールド・シャンハイ——暗黒街の帝王』東方書店1987年参照。

- 15 注5の前掲書 S. 115ff.

- 16 このVTRは関西大学視聴覚教室で保有しており、随時見ることができる。

- 17 1945年7月17日、米軍機が虹口地区に理由のない爆撃をおこない、31名のユダヤ人が死亡し、約250名が負傷した。

- 18 Klaus Mehnert: *Ein Deutscher in der Welt. Erinnerungen 1906—1981*, Fischer Taschenbuch Verlag 1983, S. 312f.

- 19 前掲書 S. 308f. 参照。メーナートの父は第一次大戦でドイツ兵として戦死した。彼自身はテュービンゲン、ミュンヘン、ベルリンで学び、1928年ドクター取得、米カリフォルニアに交換学生として留学、暫時 DAAD の書記をつとめてから雑誌「東欧」の主筆、後にドイツ各新聞の通信員としてモスクワに駐在、さらに米、ハワイ、中国で政治学教授となり、戦後は西独アーヘンTHの教授として定年引退、また「キリスト者と世界」誌の論説主幹。彼は今日のいわゆる「国際関係論」を講ずるのに最適の偉材であり、独ソ、米ソ、米中、日ソ、日独、日中関係などに精通し、たびたび来日して日独交換学生制度の最初の提案者ともなり、若き日の最初の来日では新渡戸稲造の紹介状を携行してきたという。早くからリヒャルト・ゾルゲとは親交があり、ドイツ系ユダヤ人を父に、ロシア人を母にもつゾルゲという俊秀が次第に左傾していった運命的道程を、この書の中でも詳し

く回顧している。

- 20 本来なら前稿に直ちにフリッツ・カウフマンの「回想」(下)が続くべきだったが、この後半期の回想の前提となるべき諸要素を今回でさらに補足して十全を期す必要を考え、次回の第3稿で「回想」の後半期を総括的に展開することとした。それは上海への旅を終えてから後の仕事となる。

[その他の参考文献] (前回の稿に掲載のものを除く)

- 1 Alfred W. Kneucker : *Zuflucht in Shanghai. Aus den Erlebnissen eines österreichischen Arztes in der Emigration 1938—1945*. Bearb. u. hrsgb. von Felix Gamillscheg. Nachwort von Kurt R. Fischer. Hermann Böhlau Nachf. Wien 1984. (著者クノイカー1904—1960はウィーンのカトリック系ユダヤ家庭出身の泌尿器科医, 晩年はシカゴ医大教授. 38年スウェーデン, ロンドン経由, クウェーカー派の提案でインドシナへ教授職に渡航時抑留され, 上海に逃げ, 42年以降上海ゲッターで医療に従事. その体験をドキュメンタリー小説風にし書き遣し, 編者により整理上梓された. 本テーマ資料として第一級の貴重な文献, 後記担当で解説するフィッシャーも1922年ウィーン生まれ, チェコをへて上海に亡命し, 戦後永く在米で教授職, 1978年ウィーン大学の教授として帰郷, 著者の身近な知己として内容も重要な意味をもち, 共に第3稿で活用紹介したい)
- 2 Clara Malraux : *Das Geräusch meiner Schritte. Erinnerungen*. Knaur Biographie 1984. (クララ・マルロー1897—1982 はドイツ系ユダヤ出自でフランス市民権を得た家庭に生まれ, 1921年アンドレ・マルローと結婚, 夫の作品『征服者』1928, 『人間の条件』1933年等の舞台となった中国各地を共に歩み, 31年には来日, 38年スペイン市民戦争に参加の末期にマルローと離婚, 大戦後は作家として自立, 長短篇作品を発表, またヴィーヘルト, カフカ, リンザー等の仏訳も行い, 本書は波瀾万丈なマルローの生涯の世界を駆けめぐる歩みを含む自伝であり, 上海への言及も多い)
- 3 Berund Ruland : *Deutsche Botschaft Peking. Das Jahrhundert deutsch-chinesischen Schicksals*. Hestia Verlag 1973. (1939年以降まで一世紀にわたり中国に与えたドイツの影響の大きさについての外交史的記録, 特に, 孫文のソ連との軍事提携に対抗する蒋介石——日本の士官学校に学び, 日本陸軍に対するプロイセン軍国主義の絶大な影響力を知る——の招請したドイツ軍事顧問団の教育指導による軍備の組織化兵器工業化, 例えば將軍ファルケンハウゼンやゼークトの名で知られる影響力の動向は, 日中戦争と世界情勢を大きく左右する可能性を秘めて, 興深い裏面史を語り, 次掲の二著とも密に関連する)
- 4 エドガー・スノウ『極東戦線』梶谷善久訳1987年, 同著『アジアの戦争』森谷巖訳1988年, 共に筑摩叢書。
- 5 Werner Keller : *Und wurden zerstreut unter alle Völker*. Dromersche

- Verlagsanstalt 1966. 邦訳『ディアスポラ』上下, 迫川由和・天野洋子訳山本書店1982年(中・近世に最も早くアジア, 中国地域に進出したユダヤ人とヨーロッパとの関係の詳しい記述がある)
- 6 DAAD Quartal: „*Ein Traum ist Wirklichkeit geworden*“. 1987年秋報道, 中国と西独のゲルマニスト・コロキウムが初めて87年9月15—20日北京で盛大に開催され, 日本からも「ハイネとユダヤ問題」を専攻する木庭宏(神戸大)等が参加した。いわゆる「文革」の影響で大巾におくっていたこの種の交流集会により, 現在英語・日本語に次ぐ学習熱の高まりを示すドイツ語教育の促進が熱心に討議された。近年, 中国には西独の技術者が多数派遣されつつあり, 今後の独中関係の接近は注目に値する。
- 7 Erwin Wickert: *China von innen gesehen*. Deutsche Verlags-Anstalt, 1982. (著者は1915生まれ, 30年代半ばの学生時代から中国を訪ね, 1945年まで外交官補として東京と上海で活動, 戦後帰独して一時文筆家とても名声を得, ロンドン, ブカレストの大公使も歴任して1976—80年の間北京駐在西独大使。現在のドイツで最もよく中国の生きた歴史・文化風土を知り, 中国要人に知己も多い理解者)
- 8 Otto Braun: *Chinesische Aufzeichnungen*. Dietz Verlag, 1975. 邦訳『大長征の内幕』瀬戸聲吉訳恒文社1977年(著者1900—1974は中国名李徳または華夫, 毛沢東のいわゆる「大長征」に参加した唯一の外国人としての体験者で, 貴重な内容を含んでいるが, きびしい中ソ対立, ひいては東独と中国との疎隔関係下で, 反毛沢東主義の立場から反中国宣伝工作の一環として書かれた側面をもつ点を考慮する必要がある)
- 9 矛盾『子夜』小野忍・高田昭二訳上下, 岩波文庫1962年。(原作は1933年発表, 舞台は1930年の国際都市上海, 内戦下中国で, 外国資本に対抗して民族資本の産業振興に悪戦苦闘する玉石混じる群像を中心に半植民地社会の縮図を描きだす力篇で映画化もされた。Franz Kuhn: *Zwielicht* のドイツ訳があり, 訳者クーンは当時上海に駐在した新聞記者で後にベルリン大学教授。当時の上海在住中国人上層部のムードがきわめてリアルに描かれ, 例えば「彼らの話題はいまや軍事・政治を離れて娯楽に移った——ルーレット, 淫売窟, ドッグ・レース, トルコ風呂, ダンサー, 映画スターである……」上巻50ページ。また国府軍の雷参謀が最前線に向う前夜, 呉夫人——上流企業家の妻——の前に一冊の本を捧げる「それは, ひどく痛んだ『若きウェルテルの悩み』であり, 開いたページには, しおれた白バラが挿まれている。嵐のような5・30運動初期の学生会時代のことどもが, いきなり稲妻のようにこの本から, 白バラからとび出して, 呉夫人に衝撃を与え, 全身に戦慄を覚えさせた……」同106ページ)
- 10 阿部知二『北京』第一書房1938年。
- 11 林京子『上海』中央公論社1983年。(少女時代の上海体験が現在の上海旅行に重

ねあわせて描きだされる秀作)

- 12 岡崎嘉平太『中国問題への道』春秋社1971年。
- 13 亀井勝一郎『中国の旅の思い出。私の画帖』大和書房1966年。
- 14 ヴィッキー・バウム『上海ホテル』葦田坦訳、改造社1939年(通俗小説ながら、中国、ドイツ、日本、アメリカ、白系ロシア、ハワイ等々の生まれの各層の登場人物のそれぞれの生い立ちから始めて、数奇な運命がそれらの人々を国際都市上海に吹きだまりのように吹きよせ、上海を舞台に国際色の錯綜するドラマを織りあげ、一夜上海ホテルに集まり宿る人々の上に中国の軍用機が爆弾を投下、全滅の悲劇で終る。Vicki Baum(1888—1960)はウィーン生まれのユダヤ女性、この作品 *Menschen im Hotel* (1929)、英訳 *Grand Hotel* (1930) が世界的なベストセラーとなり、映画化もされ、1931年米国に定住し、作家生活を続けた。自伝 „Es war alles ganz anders.“ 1962がある
- 15 尾崎秀樹『ゾルゲ事件と現代』勁草書房1982年(ゾルゲの妻石井花子は深く敬愛した夫ゾルゲの処刑後、その遺体が雑司ヶ谷共同墓地に廃棄されたのを二年がかりで探りあて、遺骨と遺品を改めて多摩墓地に葬り、「戦争に反対し世界平和のために生命を捧げた勇士ここに眠る」と刻んだ墓碑を建てた)
- 16 Schellenberg: *Aufzeichnungen des letzten Geheimdienst unter Hitler*. (Moewig, Memoiren 4112) (本書の中にゾルゲ事件を担当した在東京ゲシュタポ首長の悪名高いマイジンガー (Meisinger) 大佐の活動の記述があり、マイジンガーは常時上海ユダヤ人の動向を監視し、管轄下においていたことが上掲書メーナーットの記述にも言及されていて関連が深い)
- 17 高杉一郎「胡愈之さんのこと、そして重慶」「みすず」1987年4月号(1986年7月25日—8月2日北京で開かれた国際 에스ペラント 語世界大会に参加した中国紀行で、ザメンホフのエスペラント語創始が1887年7月だから、99年目の記念大会、54カ国約2,500名の集まる盛会であった。日本から357名、西独からも141名参加、日中仏米独の順の数で、翌87年のワルシャワでの百周年大会を控えての重要な意義をもち、この大会を支える中国 에스ペランティスト 要人たちの詳しい記述がある。長谷川テルと上海の活動もこの歴史に刻まれている。ザメンホフがリトアニア生まれのユダヤ人なればこそ世界語 에스ペラント を創始したことはいう迄もない)
- 18 辛基秀「ゴミ捨場にあった尹奉吉の遺体」「青丘文化」1987年12月号(1932年4月の上海で天皇誕生日を奉祝する虹口公園の祝賀式に、各国外交官の列席する中で、水筒爆弾が炸裂し、白川軍司令官、重光葵公使、村井総領事等は重傷を負った。白川は2カ月後に死亡。この有名なテロ事件のテロリストは「韓国人勇士」尹奉吉25才であり、上海に大韓臨時政府があることを全世界に知らしめた。尹は直ちに軍法会議で死刑宣告、大阪に送られ、極秘裡に金沢へ移送、銃殺された。1945年12月、解放後の在日朝鮮人青年50名がこの尹の銃殺後ゴミ捨場に埋められ

- た遺体を三日がかりで発掘し、義士尹奉吉の新しい納棺を囲んで一同記念撮影を行なった。この時の写真類が今も金沢に保存され、当時発掘に参加した人々も健在であることを伝えている)
- 19 籠谷真智子「本願寺上海別院の出会いと別れ——九條武子の旅から」『同朋』1988年2月号(大正年間に建てられた上海別院本堂や高塔を九條武子が訪ねたのは1923年で、往時の壮麗が偲ばれるが、その高塔は「文革」時に破壊され、僅かに本堂上層の寺紋彫刻などが遺されていたが、近年遂にその別院跡は完全に姿を消して、跡地に鉄骨の新建築が建設中である)
 - 20 井口晃「〈孤島〉時期の上海——記録文学集『上海の一日』について——」(中央大学人文科学研究所編『希望と幻滅の軌跡・反ファシズム文化運動』中央大学出版部1987年所収)
 - 21 西井一夫「上海の砂時計——フランス租界・武田泰淳と堀田善衛」(写真・平嶋彰彦)『毎日グラフ』1987年10月18日号。
 - 22 羽根田市治『夜話上海戦記・昭和六年～二十年』論創社1984年。
 - 23 枝川公一『上海読本』西北社1983年。
 - 24 小野千穂『上海・劇的な…いま』朝日ソノラマ1987年。
 - 25 上田賢一『上海・パノラマウォーク』(写真・糸川耀史)新潮文庫1987年。
 - 26 藤原恵洋『上海・疾走する近代都市』講談社現代新書1988年。
 - 27 依田憲家「民度文化・アヘン戦争時期の日中比較」『無限大』1987年夏号(シンポジウム・日本文化と江戸時代)
 - 28 秋山元秀「上海」連載(1)～(4),『月刊百科』(平凡社)1987年6,7,9,12月号。
 - 29 小堀倫太郎編『写真集・懐かしの上海』,国書刊行会1984年。
 - 30 James Trager: *The People's Chronology; A Year-by-Year Record of Human Events from Prehistory to the Present*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1979 (J. トレーガー著, 鈴木主税訳『トピックス&エピソード世界大年表』, 平凡社1985年)
 - 31 春名 徹「近代の逆説——上海と大坂——」,『is』14号, ポーラ文化研究所1981年。
 - 32 春名 徹「見出された都市〈上海〉」,『is』17号(1982年)～25号(1984年),7回連載, ポーラ文化研究所。
 - 33 春名 徹「1862年幕府千歳丸の上海派遣」, 田中健夫編『前近代日本の国家と対外関係』吉川弘文館1987年所収。
 - 34 ゴンチャロフ・井上満訳『日本渡航記』, 岩波文庫1941年。
 - 35 A Steven Spielberg Film: *Empire of the Sun*. 1987.

Deutsche Juden in Schanghai (II)

Ein Intermezzo

Hajime Yamashita

Mein Manuskript (II) ist diesmal als eine Vorbereitungsarbeit dazu geschrieben, am kommenden Herbst die Fudan-Universität in Shanghai drei Monate lang zu besuchen und über dieses Thema an Ort und Stelle zu besichtigen und wirklich zu untersuchen.

Hierbei also vorerst sozusagen als ein Intermezzo behandle ich besonders das judenfreundliche Manöver des japanischen Mariner-Geheimdiensts in Shanghai (hauptsächlich die eifrigen Bemühungen von Inuzuka-Taisa) und die damalige Sachlage der deutsch-österreichischen Juden-Emigranten dort.

David Kranzler (Prof. an der New York City-University) unterschied in seiner einschlägigen Untersuchung vier Entwicklungsphasen der japanischen Politik gegenüber den Juden : 1931-1935 Gleichgültigkeit/1936-1938 freundliche Tendenzen/1938-1941 positive Haltung/1941-1945 Rückfall in die Gleichgültigkeit mit einem eher feindseligen Unterton. Hier muß jedoch daran erinnert werden, daß die japanische „Feindseligkeit“ in keiner Weise mit der nationalsozialistische Barbarei verglichen werden darf. Die Haltung Japans gegenüber den Juden bzw. dem Antisemitismus war ambivalent, aber frei von historisch bedingter Emotionalität.

Im Hongkou-Bezirk in Shanghai, wo die jüdischen Flüchtlinge unwillkürlich einwohnen mußte, entstand seit 1937 ein völlig neuer Lebensstil, der den Umständen entsprechend zwar desolat, aber von vielen Hoffnungen geprägt war : Hongkou wurde das „Klein-Wien“ von Shanghai. Dort standen in den Jahren 1938-40 Restaurants, Cafés, Kaufläden, Werkstätten, Kliniken, Schulen usw.

Über ihre späteren Schwierigkeiten seit 1942 möchte ich nicht nur aufgrund der Erinnerungen Fritz Kauffmanns und der wichtigen Dokumentation von Frau Kiyoko Inuzuka, sondern auch aufgrund der kostbaren Materialien von Klaus Mehnert („Ein Deutscher in der Weit“), Alfred w. Kneucker („Zuflucht in Shanghai“), Siegfried Englert („Shanghai, Stadt über dem Meer“) u. a. die ich neu in die Hand bekommen habe, in meinem nächsten Manuskript (III) nach meinen eigenen Untersuchungen dort weiter ergänzungsweise umfangsreich beschreiben. (Fortsetzung folgt)